

序 文

昨昭和三十七年度のこの学会の總會の際に行われたシンポジウムに於いて、その名称を考古地理学とすべきか又は遺跡地理学とすべきかというような議論がでて、何れと決すべくもなかったが、話しあいのうちに、両者の考え方に本質的な違いはないことがわかり、寧ろ文献のない時にどうしたらよいかというように、議論の主眼が帰着したのではなかったかと思う。文献の資料がなければ、それによる立論はそれまでと思ひあきらめて、あとは主観的に論をすすめていくか、或は公式論的に論をたてていくかするより他に方法はないであろう。前者は往々にして独善的になりやすく、後者は科学的客観的とうたいながら、結局は観念論に墮していくことになるのも止むを得ないであろう。そこでこうしたゆきづまりを打開するために、遺跡や遺構を——先史時代にかぎらず、歴史時代に及んでもよい——たより、考古学的な方法によつて新しい道をうちたてようとしているのが、考古地理学或は遺跡地理学の人達の考え方であると思う。言うまでもなく、最近考古学の發達は、従来の珍奇骨董主義から、庶民的な生活環境の解明というような方向に進み、そこに当然地理学的な見解が要請されることになってきた。又考古学歴史学が進歩すればするほど考古学歴史学の方法のみでは解明できない面が多くなり、ここに地理学的分野の開拓が要請され、考古歴史地理学的研究の必要性が認識されることになった。

人はややもすると、考古地理学というのと、その名にとらわれて、時代的には先史時代ばかり取り扱わなければならぬと考え易いが、歴史時代にもこうした新しい分野がひらかれていてもよいことは言うまでもない。本巻に収められた論文も、そういった眼で見た時、まことに意義の大なるものがあり、ここに新しい分野をきり開いていこうと

する多くの意欲的な論文に接することができるのは、何よりも喜ばしいことである。さらに具体的にとりあげるならば、条里の問題などは従来の研究では一応限界にきた感があつて——勿論それ自体の研究は重要なことであつて、それをないがしろにしようとするわけではない——何か新しい見解が生れて来なければと考へていた次第であるが、ここに考古地理学的方法による、新たな問題の提起がみられ、これを中心として研究を推しすすめていくならば、条里遺構を通じての新しい見解の展開必しも不可能でないと信じられる次第であつて、新進の人達による、このような意欲的な論文の多数がここに掲載されていることは、私の何よりもよるこびとする所である。私は最近公私共に雑用に追われ、研究の方は一向にすすまずおろそかになつて、まことに申しわけないことと思つている次第であるが、かつて先史地理学、歴史地理学の研究に身をゆだねたころを思い、当時に比してこの方面の研究が格段の進境を呈するにいたつた盛況を見て感無量なものがある。と同時に、自分のまいた一粒の種子が今日このように見事に成長したことを心からよろこび、更に今後の発展を祈らざるを得ない次第である。

昭和三十八年三月十一日

彦根にて

小 牧 実 繁